

## 舌癌の頸部郭清組織中に耳下腺Warthin腫瘍の認められた1症例

著者	吉田 光秀, 熊本 裕行, 一迫 玲, 大家 清, 後藤 哲, 佐藤 修一, 川村 仁
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	17
号	1
ページ	66-70
発行年	1998-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/31623">http://hdl.handle.net/10097/31623</a>

原 著

## 舌癌の頸部郭清組織中に耳下腺 Warthin 腫瘍の認められた 1 症例

吉田光秀・熊本裕行\*・一迫玲\*  
大家清\*・後藤哲\*\*・佐藤修一\*\*  
川村仁\*\*

東北大学大学院歯学研究科

(研究科長：三谷英夫教授)

\*東北大学歯学部口腔病理学講座

(主任：大家清教授)

\*\*東北大学歯学部口腔外科学第一講座

(主任：茂木克俊教授)

(平成 10 年 1 月 27 日受付, 平成 10 年 5 月 11 日受理)

### A case of Warthin's tumor of the parotid gland found in a specimen extirpated on radical neck dissection for tongue carcinoma

Mitsuhide Yoshida, Hiroyuki Kumamoto\*, Ryo Ichinohasama\*,  
Kiyoshi Ooya\*, Satoshi Goto\*\*, Shuichi Sato\*\*  
and Hiroshi Kawamura\*\*

*Tohoku University School of Dentistry*

(Director : Prof. Hideo Mitani)

\**Department of Oral Pathology, Tohoku*

*University School of Dentistry*

(Chief : Prof. Kiyoshi Ooya)

\*\**Department of Oral and Maxillofacial Surgery I,*

*Tohoku University School of Dentistry*

(Chief : Prof. Katsutoshi Motegi)

**Abstract :** The incidence of multiple primary neoplastic lesions in the head and neck region has increased in recent years. This article presents a rare case of Warthin's tumor of the parotid gland that was found in a specimen extirpated during radical neck dissection for tongue carcinoma. The patient, a 56-year-old man, was admitted because of tenderness of the tongue. Physical examination showed an irregular-shaped indurated ulcer on the right lateral border of the tongue as well as swelling of the right cervical lymph nodes. Histological examination of a biopsy specimen of the tongue indicated a diagnosis of well-differentiated squamous cell carcinoma. After preoperative chemotherapy, the patient underwent partial resection of the tongue with radical neck dissection on the right side. Histologically, squamous cell carcinoma was found to invade the deep muscle layer of the tongue and metastasize to the cervical lymph nodes. Seven months after the operation, swelling of the left cervical lymph nodes was noticed. Radical neck dissection was performed on the left side. Histological examination of the surgical specimens showed Warthin's tumor of the parotid gland as well as the metastasis

of squamous cell carcinoma to the cervical lymph nodes. Our findings indicate that it is important to distinguish Warthin's tumor from nodal metastases from oral cancer in patients with tumors arising in different primary sites.

**Key words:** Warthin's tumor, oral cancer, radical neck dissection

## 緒 言

近年、悪性腫瘍に対する早期診断の確立や治療法の進歩による治療成績の向上、平均寿命の延長等により長期生存例の増加がみられ、腫瘍性病変の重複頻度は増加傾向にあるといわれている<sup>1-3)</sup>。しかし、口腔癌と Warthin 腫瘍が合併した報告例は少ない<sup>4-8)</sup>。本論文では舌癌の頸部郭清術後の病理組織学的検査で耳下腺 Warthin 腫瘍の合併が確認された 1 症例を報告する。

## 症 例

患 者：56 歳，男性。

初 診：平成 8 年 10 月 28 日。

主 訴：舌右側辺縁部の接触痛。

家族歴：特記事項なし。

既往歴：幼少時に長崎の原子爆弾による被曝経験がある。15 年前より不整脈で通院治療を行っている。

現病歴：平成 8 年 9 月頃より舌右側辺縁部の接触痛を自覚し、某歯科で右上下顎臼歯鋭縁の削合を行ったが痛みが消えないため、東北大学歯学部附属病院を紹介された。

現 症：全身所見；特記事項なし。顔貌・頸部所見；顔貌は左右対称であった。右側頸部リンパ節に 10 mm 径及び 20 mm 径の腫脹がみられた。口腔内所見；舌右側辺縁部に 15 mm×20 mm の不整形の潰瘍がみられ、周囲に硬結を触知した (図 1)。発赤と接触痛を伴っていたが、運動障害はみられなかった。

検査所見：一般臨床検査；血液・血清検査で異常はみられなかった。胸部 X 線検査；明らかな異常陰影は認められなかった。Ga シンチレーション検査；集積像が舌及び右側頸部にみられたが、これらの部位以外に明らかな集積像はみられなかった。舌生検；角化傾向の著明な高分化型扁平上皮癌の浸潤性増殖がみられ、癌性潰瘍を形成していた (図 2)。

臨床診断：舌癌 (T<sub>2</sub>N<sub>1</sub>M<sub>0</sub>)。

処置及び経過：術前化学療法 (cisplatin 70 mg, pirarubicin 20 mg, peplomycin sulfate 5 mg×3) の後、平成 8 年 11 月に舌部分切除術及び右側全頸部郭清術

が施行された。その後外来にて経過観察していたが、術後 7 ヶ月に左側頸部の腫脹を触知した。CT 検査を行った結果リンパ節転移が疑われた (図 3)。平成 9 年 6 月に左側全頸部郭清術が施行された。

病理組織学的所見：平成 8 年 11 月の手術標本では、舌の筋層深部に達する扁平上皮癌及び上深頸リンパ節に転移がみられた。平成 9 年 6 月手術時の摘出標本では、中深頸リンパ節に舌扁平上皮癌の転移がみられ (図 4)、手術時に耳下腺リンパ節として摘出された組織に



図 1 口腔内所見：舌右側辺縁部に周囲に硬結を伴う潰瘍がみられる。



図 2 舌生検の病理組織像：癌真珠形成が著明な高分化型扁平上皮癌の筋層への浸潤性増殖がみられる。(HE, ×20)

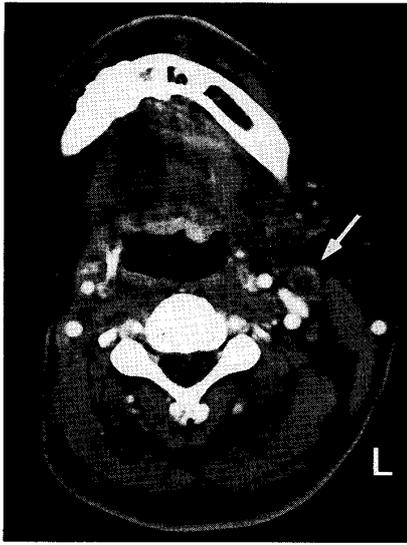


図3 CT所見(造影): 左上内深頸静脈リンパ節領域で内部に低吸収域を伴う腫大したリンパ節がみられる(矢印)。

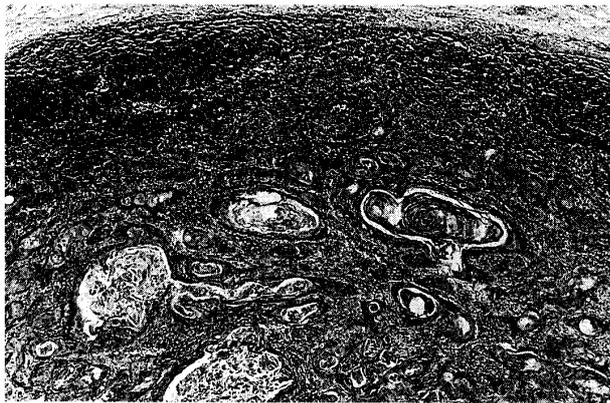


図4 中深頸リンパ節の病理組織像: 扁平上皮癌の転移がみられる。(HE,  $\times 20$ )

は耳下腺及びリンパ組織に隣接する腫瘍がみられた(図5A)。腫瘍は、二層性の配列を示すオンコサイト様上皮性細胞の乳頭状増殖とリンパ濾胞を伴うリンパ性組織の増殖からなる Warthin 腫瘍であった(図5B)。

## 考 察

口腔癌は口腔領域の悪性腫瘍の大部分を占め、舌、上顎洞、歯肉の順に多発する<sup>9)</sup>。舌癌は口腔癌の約半数に達し、50~60歳に多く、男女比は約2:1である<sup>10,11)</sup>。好発部位は側縁部で、組織学的には大多数が扁平上皮癌である<sup>10-12)</sup>。リンパ節転移は顎下部及び頸部に生じ、多くは同側で、進行病変では反対側にも生じる<sup>10,11)</sup>。遠隔転移は肺に最も多く、骨、肝、腎等にもみられる<sup>12,13)</sup>。本症例は、56歳男性の舌右側辺縁部に生じた高分化型の扁平上皮癌の典型例で、両側の所属リンパ節に転移が認められた。しかし現在まで明らかな局所再発及び遠隔臓器への転移はみられていない。

Warthin 腫瘍は耳下腺部に好発する唾液腺由来の良性上皮性腫瘍で50歳以上の男性に多い<sup>14,15)</sup>。組織学的には、二層性の配列を示すオンコサイト様上皮性細胞の乳頭状増殖と胚中心を伴うリンパ性組織の増殖が特徴である<sup>14-16)</sup>。成因としては、リンパ節内に存在する異所性耳下腺導管上皮の増殖説が広く支持されている<sup>14,15)</sup>。本症例も頸部郭清術で耳下腺リンパ節として同時に一塊として切除された組織中に Warthin 腫瘍がみられたことより、耳下腺組織とそれに関連するリンパ組織が腫瘍の起源と考えられた。

近年、腫瘍性病変の重複頻度は増加傾向にあり、特に頭頸部腫瘍には重複癌が多いといわれている<sup>1-3)</sup>。重

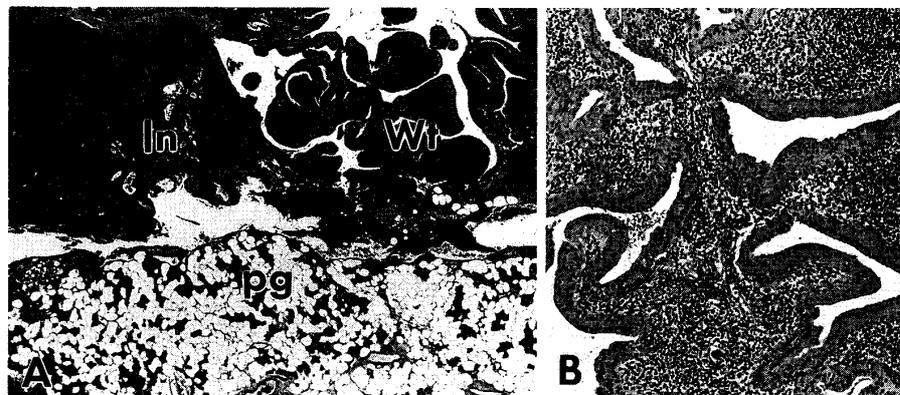


図5 耳下腺の病理組織像: (A) 耳下腺組織(pg)に接したリンパ組織(ln)と腫瘍組織(Wt)がみられる。(HE,  $\times 12$ ) (B) オンコサイト様の上皮性成分の乳頭状増殖と、その周囲にリンパ性組織の増殖がみられる。(HE,  $\times 50$ )

複癌は、Warren と Gates<sup>17)</sup> により (1) 各腫瘍は一定の悪性像を示すこと、(2) 各腫瘍は互いに離れた部位を示すこと、(3) 一方の腫瘍が他方の転移であることが除外されなければならないことの3条件が診断基準として定義されている。本症例は悪性腫瘍と良性腫瘍の合併で重複癌の定義からははずれるが、同様に口腔癌と腫瘍の合併例は現在まで数例報告されている (表1)<sup>4-8)</sup>。これらの報告では中年以降の男性に多くみられている。また大部分の症例では、術前に耳下腺腫瘍の臨床診断が得られていたが、Iannaccone<sup>4)</sup> と岡上ら<sup>6)</sup> の症例では頸部郭清中に唾液腺腫瘍として気付かれた。本症例は頸部郭清中に耳下腺腫瘍とは気付かれずに耳下腺リンパ節として切除された。口腔癌と Warthin 腫瘍の合併症例については、口腔癌の転移経路<sup>10-13)</sup> 及び Warthin 腫瘍の好発部位や成因<sup>14,15)</sup> をふまえると、両者では治療法、予後が大きく異なるため、その鑑別が重要であると思われる。

原子爆弾の被曝による後障害として悪性腫瘍の発生はよく知られた事実である<sup>18)</sup>。特に白血病や甲状腺癌、乳癌は発生の増加が示されているが、口腔癌でも相対的にリスクが上昇することが報告されている<sup>18,19)</sup>。また唾液腺腫瘍に関しては、被曝者において良性腫瘍の多形性腺腫、Warthin 腫瘍、悪性腫瘍の粘表皮癌、腺様嚢胞癌などが有意に増加傾向を示すとの報告がある<sup>20,21)</sup>。本症例は血液学的所見に異常は認めないもの

表1 口腔癌と Warthin 腫瘍の重複した症例報告

報告者	年齢	性別	重複腫瘍の種類
Iannaccone P (1975)	70	女	耳下腺粘表皮癌 甲状腺癌 舌扁平上皮癌 耳下腺 Warthin 腫瘍
佐藤徹ら (1990)	72	男	口峽咽頭扁平上皮癌 耳下腺腺体外 Warthin 腫瘍
岡上真裕ら (1994)	70	男	頬粘膜扁平上皮癌 上頸部神経節細胞種 顎下部 Warthin 腫瘍
上野弘貴ら (1996)	71	男	舌扁平上皮癌 耳下腺 Warthin 腫瘍
上田晶義ら (1997)	59	男	舌扁平上皮癌 耳下腺 Warthin 腫瘍
自験例 (1997)	56	男	頬粘膜扁平上皮癌 上内深頸リンパ節 Warthin 腫瘍
自験例 (1997)	56	男	舌扁平上皮癌 耳下腺 Warthin 腫瘍

の、幼少時に原子爆弾の被曝経験を有しており、本症例における重複腫瘍の発生と被曝との関連についても興味をもたれる。

本論文の要旨は、第32回東北大学歯学会(1997年12月、仙台)において発表した。

**内容要旨:** 近年、腫瘍性病変の重複頻度は増加傾向にあるといわれている。本論文では舌癌の頸部郭清術後に病理組織学的検査で Warthin 腫瘍の合併が確認された1症例について報告する。患者は56歳男性で、舌の接触痛を主訴として来院した。口腔内診査では舌右側辺縁部に不整形の潰瘍がみられ、潰瘍周囲は硬結を呈し、右側頸部リンパ節に腫脹を触知した。舌生検で高分化型の扁平上皮癌と診断され、術前化学療法の後、舌部分切除術及び右側全頸部郭清術が施行された。手術標本では、舌の筋層深部に達する扁平上皮癌及びリンパ節転移がみられた。術後7ヶ月に左側頸部リンパ節への転移が疑われ、左側全頸部郭清術が施行された。摘出組織標本では舌扁平上皮癌のリンパ節転移とともに耳下腺部に Warthin 腫瘍がみられた。口腔癌と Warthin 腫瘍の重複症例については、癌のリンパ節転移との鑑別が重要であると思われる。

## 文 献

- Shikhani, A.H., Matanoski, G.M., Jones, M.M., Kashima, H.K. and Johns, M.E.: Multiple primary malignancies in head and neck cancer. Arch. Otolaryngol. Head Neck Surg. **112**: 1172-1179, 1986.
- 安原秋夫, 石崎久義, 森田浩史, 峯田周幸, 野末道彦: 当科における頭頸部重複癌症例の臨床統計学的観察. 日耳鼻 **95**: 686-696, 1992.
- 伊藤恵子, 久保田 彰, 佃 守, 澤木修二: 頭頸部領域の重複癌. 癌の臨床 **38**: 675-678, 1992.
- Iannaccone P.: Multiple Primary Tumors. Four distinct head and neck tumors. Arch. Pathol. **99**: 270-272, 1975.
- 佐藤 徹, 成瀬裕久, 中島京樹, 中川洋一, 山近重生, 浅田洗一, 石橋克禮, 菅原信一: 同側の Warthin 腫瘍を合併し, 転移を疑った口峽咽頭部扁平上

- 皮膚癌の1例(抄). 口科誌 **39**: 1169-1170, 1990.
- 6) 岡上真裕, 長谷川光晴, 篠田涼子, 高成田倫子, 松永心子, 堀 稔, 松本光彦, 田中 博, 浅野博文, 斉藤 学, 小宮山一雄, 茂呂 周: 頸部郭清組織中に Warthin 腫瘍と神経節細胞腫が認められた頬粘膜癌の1例(抄). 日口外誌 **40**: 1411, 1994.
  - 7) 上野弘貴, 金子忠良, 石井 潤, 渡辺裕之, 渡辺正人, 千葉博茂: 舌癌のリンパ節転移を疑った耳下腺下極の腺リンパ腫の2症例. 日口外誌 **42**: 290-292, 1996.
  - 8) 上田晶義, 小野 潤, 高橋雄三, 戸田ひとみ, 倉地利昌, 森山 孝, 榎本昭二: 頬粘膜扁平上皮癌の頸部リンパ節転移を疑った腺リンパ腫の1例(抄). 口科誌 **46**: 466, 1997.
  - 9) 石川梧朗: 口腔病理学 II. 永末書店, 京都, 1982, pp. 608-613.
  - 10) Flamant, R., Hayem, M., Lazar, P. and Denoix, P.: Cancer of the tongue. A study of 904 cases. *Cancer* **17**: 377-385, 1964.
  - 11) 竹田千里, 鷺津邦雄: 舌がん. 癌の臨床 **20**: 301-310, 1974.
  - 12) 小守 昭, 森 勝好, 山田直之, 石川梧朗: 剖検例よりみた顎口腔領域悪性腫瘍の遠隔転移について(第1報). 口科誌 **24**: 287-297, 1975.
  - 13) Topazian, D.S.: Distant metastasis of oral carcinoma. *Oral Surg.* **14**: 705-711, 1961.
  - 14) Thompson, A.S. and Bryant, H.C.: Histogenesis of papillary cystadenoma lymphomatosum (Warthin's tumor) of the parotid salivary gland. *Am. J. Pathol.* **26**: 807-849, 1950.
  - 15) Bernier, J.L. and Bhaskar, S.N.: Lymphoepithelial lesions of salivary glands. Histogenesis and classification based on 186 cases. *Cancer* **11**: 1156-1179, 1958.
  - 16) Warthin, A.S.: Papillary cystadenoma lymphomatosum. A rare teratoid of the parotid region. *J. Cancer Res.* **13**: 116-125, 1929.
  - 17) Warren, S. and Gates, O.: Multiple primary malignant tumors. A survey of the literature and a statistical study. *Am. J. Cancer* **16**: 1358-1414, 1932.
  - 18) Ron, E., Preston, D.L., Mabuchi, K., Thompson, D.E. and Soda, M.: Cancer incidence in atomic bomb survivors. Part IV: Comparison of cancer incidence and mortality. *Radiat. Res.* **137**: S98-112, 1994.
  - 19) Thompson, D.E., Mabuchi, K., Ron, E., Soda, M., Tokunaga, M., Ochikubo, S., Sugimoto, S., Ikeda, T., Terasaki, M., Izumi, S. and Preston, D.L.: Cancer incidence in atomic bomb survivors. Part II: Solid tumors, 1958-1987. *Radiat. Res.* **137**: S17-67, 1994.
  - 20) Land, C.E., Saku, T., Hayashi, Y., Takahara, O., Matsuura, H., Tokuoka, S., Tokunaga, M. and Mabuchi, K.: Incidence of salivary gland tumors among atomic bomb survivors, 1950-1987 Evaluation of radiation-related risk. *Radiat. Res.* **146**: 28-36, 1996.
  - 21) Saku, T., Hayashi, Y., Takahara, O., Matsuura, H., Tokunaga, M., Tokuoka, S., Soda, M., Mabuchi, K. and Land, C.E.: Salivary gland tumors among atomic bomb survivors, 1950-1987. *Cancer* **79**: 1465-1475, 1997.